



たかやすクリニック
概要DATA

住所/神戸市東区深田4-1-1 ウェル六甲ビル
2階3号室

TEL/078-843-2828

http://www.takayasu-rokko.com/

診療科目/消化器科、放射線科、成人病一般、低
保類(診療内)診療
診療時間/月~土9:00~12:00、月・火・木・金
17:30~19:30

休日/日、祝

院長/高安幸生(神戸大学医学部卒業)

予約/初診時不要

医療相談室/無

栄養相談/無

医療費のカード払い、口座振替/不可

主な設備・機器/ヘリカルCT・ドップラー超音
波・CR・画像ファイリングシステム・電子カルテ
システム・外来化学療法室

主な提携医療機関/医療法人康進会西病院(神
戸市東区)、医療法人清和会生利院(兵庫県西
宮市)



JR神戸線六甲駅より徒歩1分、阪神本線新
在家より徒歩8分

検査設備はデジタルシ
ステムで、ほかの医療施設と
の電子情報交換が可能



外来受付。おだやかで温か
い雰囲気で迎える

清潔感が保たれている院内



◆IVR療法でがん患者のQOL向上を実現

たかやすクリニック ●兵庫県神戸市

撮影=0000

**病院と連携して開放病床を活用し
国内初のがん患者への専門的なIVR療法を展開**

JR六甲駅前のビルに昨年12月1日にオープンした「たかやすクリニック」は、わが国では前例のないIVR(Interventional Radiology・画像応用低侵襲性治療)を特徴として打ち出した無床診療所である。院長の高安幸生先生はカテーテルを用いて詰まった血管を広げたり血流を変えたりする、IVRによる臨床腫瘍学を専門分野とし、特に肝臓ガン等の動脈化学療法で、前職の兵庫医科大学助教授時代から全国的に知られてきた。



電子カルテを利用し、患者に対する情報開示に努める。新しい診断と治療法を積極的に取り入れる高安先生

たかやすクリニックは高安先生の専門性を生かし、全国的に初めてと言えるIVR療法を特徴とした診療所として開業され、がん治療を担う新しい開業形態として注目を集めている。診療所の特徴について高安先生は次のように語る。

「兵庫医大にいた時からIVR療法による治療と研究を専門にしてみましたので、当初からIVRを専門領域として打ち出すことを考えていました。もちろん地域の需要に応えるためには、かかりつけ医としての役割を果たすことも大事だと

考えていますが、現状としては7、3くらいの割合で、一般診療の患者さんよりも専門領域の患者さんの方が多い位です」

IVR療法とは血管の下や足の付け根に挿入したカテーテルを、動脈をとおりて患部手前まで持っていく薬を注入するものである。患者は治療期間中、カテーテルを体内に留めたまま生活し、通院して薬を投与してもらうのだ。臓器全体に力点が在り、切除が難しくなった状態等に有効で、副作用が少ないため患者は仕事や家庭生活を継続できる。しかしがんが全身に広

がってしまった場合には適さないという。IVR療法は設備などの問題から、外来患者を対象とした診療所には適さないと言われてきた。「がんの患者さんが、入院することなく普段通りの仕事や家庭生活を維持しながら、土曜でも夜間でも外来でIVR治療を受けられる」というのは、患者さんにとってメリットが非常に大きい。また主治医として患者さん一人ひとりと向き合い、精神面も含めたケアの細かいケアを行っていくには、大病院では難しいと考える開業を決定したのである。

ただIVR療法を実施していくには、高額な医療設備・機器の整備、医師、看護師、放射線技師等のスタッフの充実が不可欠であり、小規模診療所では難しかったが、「たかやすクリニック」でそれを可能にしたのが、地域の病院と連携した開放病床の利用であった。

「たかやすクリニック」の近隣にある医療法人康進会西病院で、高安先生は20年近くIVR療法を行ってきた実績があり、同病院のスタッフとは極めて強い信頼関係が育まれてきた。同病院には高安院長がセンター長を務める「康進会西病院低侵襲治療センター」が設置され、最新鋭のデジタルアンギオグラフィシステムが導入されている。患者に入院が必要場合は、西病院の開放病床に入院してもらい、高安先生は主治医として病院へ出向き、一貫した医療を行うという形を取っている。西病院以外の病院でも、高安先生がIVR療法を行うべきの病態連携のシステムが徐々に整いつつあり、高安先生は毎朝7時に連携先病院の回診を始める。それからクリニックへと向かう仕事のスタイルは開業以来変わっていない。「専門医としての自分の技術を後進の先生方に移したい気持ちがあり、他の医療機関にも積極的に出向いて、IVR療法を若い先生方にも伝えていきたいと思っています。専門医が自分の長所を生かしたネットワークにより、病態・診療連携を進め、患者さんに医療サービスを還元していくのが本来の医療連携のあり方ではないでしょうか」